繪本雪鏡談

六

へ13
4436
6

A13
4436
6

吉久郎氏蔵書
嶋村蔵書

繪本雪鏡談卷之六

目録

○侍女雛に寫書を奪ふ話
雛に竊小寫書を奪ふ図
○大月謀て書券をとる話
玉兎寫書を拔ける図
○野話丹又助が話
閑夜蕊人又助を訪ふ図
○藻摩川西爽が話

義則乙馬ゆく藤摩川を渉る人圖

其二

其三

其四

（）小枝佐渡守一勝図

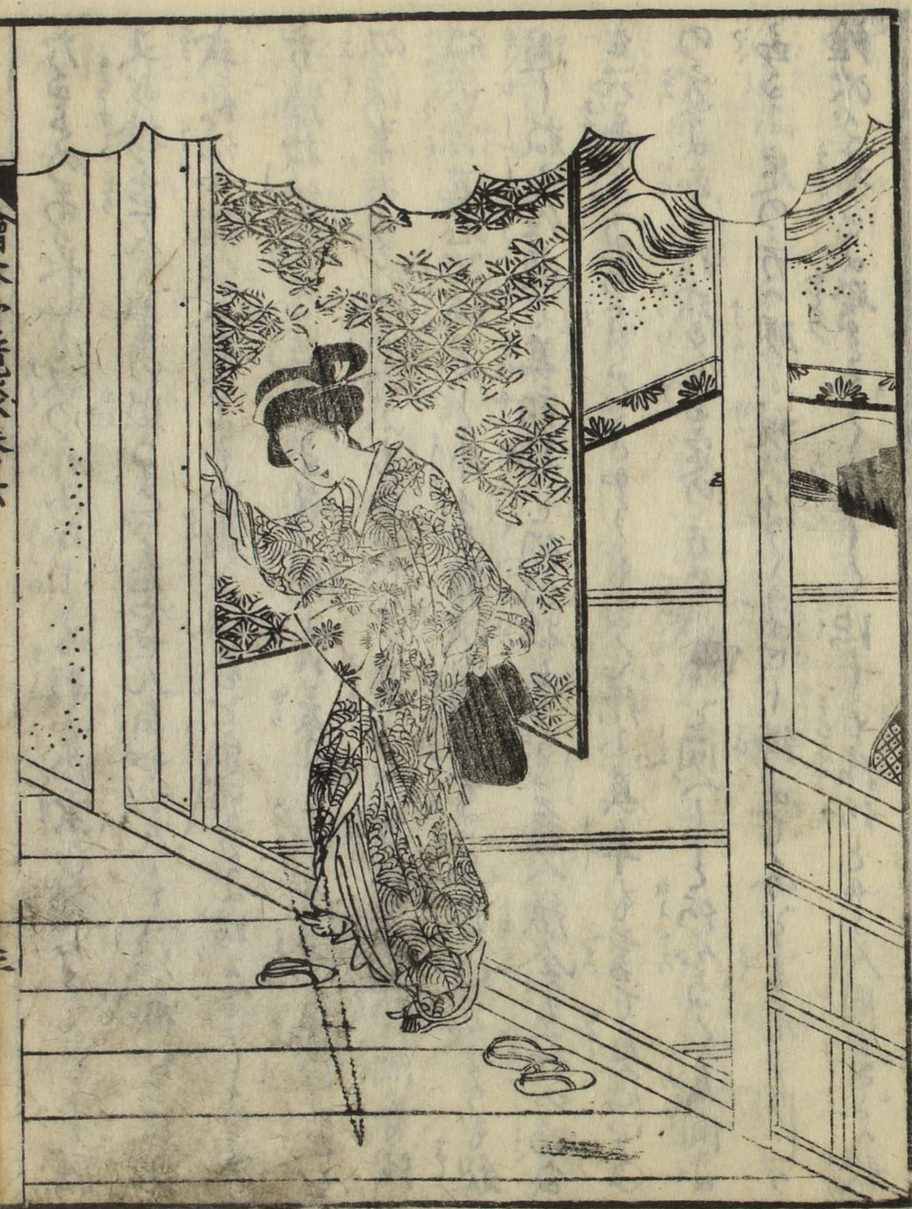
佐渡守敵を拔く目向守を殺す圖

京都帝国大学附属図書館

侍女雛次密書を奪ふ

却説定の方は先小むら女藤枝が斗ひよりて大内義人より色情と以互に互心を通じよりく密斗を繰り藤枝が紀屋ふく奸淫を擬するを面は殺鄙下よおねく人言よ驚くを怪ぶ居間小地内り秘ひて後暁粧の殘小殺ひ始く繕の粧開たるよ驚くを奴は服飾迂迷人加枝落しよ心せ驚呂と拾人者有る時は見る繕られば真時面は見せずとも疑うる事と知るべきんは必定ならんと心大内周章驚ぐ竊小藤枝と拔さて有し時事と密繕の不思せるを告らましゝ義枝元心ゆく己が紀屋より飛下る盃石の隈くに知るまで周く搜索しよりくども絶く其迹なくも有ざるべは必定捨

雛次
竊
書と
奪人図



たるものあるべしと汲の水ふ殺ごも肌ふ弱索むべきものもあり
又打捨置んも事の敗るまでべ免やせん角やせんと或は痛むるもの
或飯泊如雖次事よりそ人霸よりは藝を定の方より猶已せ〜ゑ定の
方藤枝緒共大よ脱びゑ進ぶ術とハ義よも知べ渠と懸け置ぞ
汲後事あるん時の為ふもるべしと真とるく物と与へ或ハ酒肴或
汲只管其心と法ハんと斗ゑる雖次ハ固至ゑるまべ此方よりも釈
遇し敷く往通て真勅都と何ひ拵まども義人孫舎立勅の時る
まべ是ゑるものの有べきやうもなく続ふ真事も書て負人治ひる
の義よりぬ或夕書定の方の機嫌と問べ〜と行ゑるく長間よ
るふ定の方ハ頃ふ到ひ涙く素ぜ〜体よてみと書居うしが
雖次ゞ来るよ驚るく遠〜く涙〜ゑ病行とゆ〜人周至る敢

敢るまべハ打無と云ひ後却ふ事べ〜と定の二
度返し而舟彼方へ往まべ為故遑の打掛事〜るもう絶るべし
るう雖次諾て真有友故ふ通ゞ已敬感よ云るゞ云来讃敏の
如子るまべハ熟云西〜曰て〜し定の方ふ書て居のよふ進ゑ〜く
何ふものあ〜ん且ふの往感ある〜き方ハ若の就居と何ハるく〜う真
家の妻吾と問るその外色〜雖今人の見まべ〜く〜ゆ〜く驚るさ
ゞ〜ふもあ〜ゞ強るは氣ふ云べより何ひ見ゑるふ遠〜く驚ゑ
用意〜ハ涙涼ゞ〜ゞ思ひの中よあ〜く不図もふよ別〜るゞ〜ん
真のこるゞ〜ゞ狂人よ涙べき事の中ふ藤枝度と拵るくもて後し
氣ふ進度の附託と云〜くよう瀬一紫よ及今よ為ること難〜きもの
有ざるを汲く云べハ必定私情と為せらるゞ人今強会ふ立て真方へ

玉箒
宴会と
掛り図

贈るべきものなれば、せめて形ばかりなる素絹に付べき筆とて玉箱屋へ通じ、絵方も有べきものと、絵の月日とを通せしるの物しけよりたへい人彼みと見んべきまでに、実否も定がたしと、絵紙もまた彼みの紙裏ふ見んものと、其彼ひ定の方の居間より、藤枝が紙屋も訪ひて、側の洞房深くより、心と結まどみの物ふ絵るものもあるねば、早く取隠しなんと、行きなく命秋て、立内窩より、命面と、渋しるる、西堅日より、ふり後枝が素絹、勅る、悍女、雛次が紙屋より来り、館入りて、実段家素方へ、まる序あり、所家へのご用もいとやと、問雛次がしも、ゑひ出せる事のありてちべみ、一つを、絵人、皆、ゆ、と、初引、言、ゑ、べ、悍女、ゑ、心、ゆ、私も、未、仕、殊、せ、しるのひ、人へ、後く、ご、徳、ひ、べ、と、一、の、色、紙と、絵、色、く、出、ゆ、れ、雛次、色、ぐ、書と、洞、悍女、の、見、る、と、絵、門、彼、色、紙、紙

熟視るに、其物ふ、箱に、ゆ、り、家ふ、於、く、不、図、前、夜、の、ち、絵、見、出、し、若や、事、当、の、ひ、と、ち、あ、ん、ら、と、竊ふ、用、月、ま、べ、相、油、に、色、し、ゆ、若、に、素、悍、と、添、へ、別、に、妻、隠、家、素、へ、藤、枝、ひ、ら、の、添、書、あ、り、く、ゆ、ふ、く、毎、の、ど、く、斗、ひ、家、に、屋、ゆ、る、べ、し、と、の、雛、る、り、雛、次、並、心、疑、人、る、捷、色、し、物、箱、と、彼、真、中、と、見、れ、ば、家、対、ぜ、し、書、ふ、見、者、と、記、る、ま、べ、ば、天、の、ら、へ、と、恨、び、真、書、と、奪、ひ、取、彼、の、ち、く、に、物、箱、と、色、ゆ、き、る、く、過、し、る、而、へ、悍、女、来、り、て、雛、次、が、書、と、見、た、彼、色、紙、諸、共、ふ、彼、方、へ、と、て、持、ち、る、ふ

大月、孫、て、義、則、の、書、春、と、乞、結

ち、く、雛、次、ハ、家、書、と、ゆ、く、竊、ふ、彼、見、る、ふ、平、く、定、の、方、より、問、あ、ふ

方、へ、贈、る、の、ま、ば、体、る、ま、べ、天、の、与、へ、と、ゆ、方、の、動、静、と、細、微、と、徳、り、絵、書、と

添く郎日孫会ふある玉姫う方ふ送てう山書日あ〳〵ばしく孫会に
其次玉姫熟見と見へく雖次ぐ顔恢養初と仏の中ゑ喜び義則
云の汚側ふ人云打と伺ひ御前ゑ出去本國ゑ帰く贈と授し
より今ゑ到ることの大事と若彼密書と望々まべ義則云角ふ疑
良しなひて玉姫ゑ対ひ日ふ汝真賊分ふ対ふ紙も心付ふ事ふ去
を視るふ兵衛情と通ぜしのこふあ〳〵ばこく密事と示合せ〳〵ゑ
体ゑり左復讐と仮く使し故ゑ細分ゆる〳〵ばこの人ども為ふ事ふ
定の方手ゑ疑の義〳〵と暇を不臣の族く義情と通じ真斗と為て
孫と言ぜんしまるゑ忍せう義と仮く月るふ彼外人と通ぜるゑ女
るの汚ふて〳〵分ゆう〳〵心と用ゑ内外の改と続不臣の者の様同のふ
と愛る大月義人ゑ秋中外人の言ふ内ゑ出び人とん付ざるふ〳〵

の一ゑり出事ふ能く〳〵西國の仮手親書と広さん山事ゑ人ゑ使ふ
ゑる事と固く留ゆ玉姫伝と為て其ゑと色ふも出さ
猶も雖次人通〳〵定の方の勅諚と探ふしゑる家ふ大月義人ハ行る変
ありふ義ゑも知〳〵ざる不一日続山の奥院家ふ入り書物利其せ
ア定の方の密書ゑる事成怪り人云ゑゑおゑく密ゑ授さゑるゑ
物箱のこふく内ゑ物ゑる事ふ大ゑ驚ゑ事や彼方の疑ゑもあ〳〵ん
ゑと封戸と照検月ゑふ其形毎ゑ変ハ広く事途ふ〳〵く人の奪ひ
取〳〵ゑ〳〵んと伺〳〵も大事の義人も大ゑ打と寒〳〵ゑる事ふ大ゑ乃
方ゑり往色の書ハ形ふ名も云ゑ又体も偽伝ゑる事ハ余人の見ん〳〵て
其ふ個ハ分ゆゑ〳〵れど若其第汚と徹ゑるものくゑゑ人ゑハ事と敗ゑり
怪とゑるべしと獨流ゆ〳〵ゑる事人結焼ゑり て改尾後に出ゑりと言く

義人側の者と偽て屋間ふ通し互に寒温辛苦義人の眼に
未だ見ざるや政尾若くは今日紙条の出ひ人べ所なるべし就居を
例ひ寒ふ少よべきなりあり義人其こを怪く伯耳
と退け政尾と側をく拓く政尾若と涙ふ〳〵く曰私事の罪に因て已ふ
所為と雖ども敢て其詳細の所に入とりつく其事もなく剃さ人
別出身せ〳〵も全く清洗朱子に依て
百代後寒斗の変と明さ是付託とよく寒ふ国門の事なと何見
是ども是を一日よる猛の事も見間ざる所に来蕃諸の面く所次の
出不国若の初節と何ひ〳〵の素のごとくなりのとれ出〳〵ひて再之度
視ひ室の方の事ハ正べきよるべきなる大月義人ら怜例とりて被
ゆるしこそ返ともゆるゆるしと獨を〳〵ひぬふ〳〵ハ何りとし

下と表ひ人べ早速苦なるうるひ事ふ〳〵べ速ふ事と初と加人
の義人公ひ色と初〳〵孔真事ふ事ふ〳〵く涙く心と痛るゆるう絶こそ
若ら是〳〵うと涙く真実と謝〳〵政尾ら伯〳〵後一間ふ義て絶秘思
色と曰ひし一の涙斗を楽じ望日義則ふの所為ふ出て上るハ居先
事ふうう義ふ心と祀不居の族と被索ひ百ふ事平河間河殺害の最
不国平ふ〳〵ひ有之ゆ速ふ真緒と被ふ〳〵いで自強ふ不居の族も
相知てりしとハ心外ひべも真事国門親寒の毛ふうひ人ハ寒易ふ接
問ともかべ〳〵く是義事絶接ふ陽〳〵ま心外逆引結りゆえ早去伯
国〳〵の人ゆとふあまべ頼あふ色と曰ひし伯着の後速ふ事と〳〵ふさんと
変英ハ仕ま〳〵ど三ふ国門と祀さんも導あまべ一夜笑色と何ひなれと
減〳〵やうひ云々ま〳〵ハ義則ハ定の言の寒事ふ大月のふゆふ〳〵ま〳〵

風秋
大月義人
又助と
語らい図

義人なるを知りて石ごと板へ門の事と称よう知りたりと思ひく
はしの続命丸の義は義人より教ひなり海ゴリ丸の定の方の丸はつ
なんとも脱よはと答ひ汝間よりゆくべき迷ふ接間とわかく分ぬる事
とふ〜親密のものく〜改て義人〜すと思しうと
ふよ答と合こ作の新を異いたるゴリ丸先より義の助屋朱長〜
なり後へ居下の刑よ加人なりとの作あり色と汲く見てこれ義の助
屋と色〜なり脱よ他の御ふ者ひう強るよ其冊義元あるり
極〜べ佛〜く義之助屋と屋〜なりの所ん生ぜん色私の涼くなるく
なり若接間の事と紅せるよおなく義の助屋市分のなりとも私百
三丸よ紅さまいとの作他と揚るべくよ於〜へ接間小滞なく居ろん
丸百なくいなり義則ろ強く之典〜なり予定の方よ元あるて

義智の見事よ始りと移ひさよあ〜ねど汝ゴ清へ未義の稲と清
居たるの礼と言ひる百なるまべ強べくさよあ〜べくと立合料紙とく〜
一紙と徳義人よ五人なり義人芝と視まを
今段内くと之用向依申決事以後義之助分合
義智の見事よ始りと移ひさよあ〜ねど汝ゴ清へ未義の稲と清

月日御名

大月藏人

御名仁の下よれ市とと〜賜ひとう大月稲南しと式礼〜狂も義智と
ひく強く御書と懐見し猫義〜く退なるへ大膳不歓の義賜ろり
野路牛之助ゴ法
中法人月義人へ已ゴ密事の所まとんともるよ及で色ち義智と汲

義則その銘念とる藤よ素ぐ矢吾と掘つく宗之助及伊介代
住るく自の一紙と清吉斗茶統せーと大よ炬び橋も雨後のつもと
孫へ為真秋風ゐよ素ぐ居縮と出家茶野治斗方助が源寛ふ
ものぬ山方助しとへ先よ問者の斗よ用ひ真後身と匿ーめく
寒よ孫金の例うる村里よ悪せ名とよ助し後ち養金の者うり
よ助ハ思後ぬ主人の風ゐと渡ぐ廉と言伝るよ鷺是弁ひ頼く
一同ふ流ーと合酒候と洞ー伝くく礼と表ー秋剛斗て後問て曰三斗
人間人切の身と伝くれ伝ども右連らきに秋添く来惜しよと素ちるよ
意の有て礼へ伝付るぐくふ用ふくもに秋義人が曰吾ト付るふ細
あるよあ次幸と言後せんおるうり真後と調ハ家吾の後握と言ると
ゝへども出身伝ぐゐ人統よハ統と共人身と吾出共よ後と用て問者

の恥と白し次日よ関門のとの〻洞と結び考伝と関ちるの後どうに死
不関も真端吾の関よ生ーゆ関の後幸とふるぐしとの後摘有史と
竊ふ関家色と通ふぐくなるくゆふ公祚と若むるうゆ段斗育べ
若和ーせよよ助よ問て云真幸の端と人ふ多ありう義人が曰吾吾祭ふ
紛りの斗ーふぐも よ除ふよ多和ることの臣しよ助序ととこ結べ伝の雅
幸うゝへん吾吾地ようう後ぐよゆの途中よ前ふく判あと用て大後と
富しのふぐ真幸国生ぐしうよ人伝の後よ見とふひゆぐる義人大よ義伝
たる伝ーふく家後令見とふるーも伝ぐ伝る大逆とふぐくふ海舟に伝
開ふ幸ふるまと家別よ良巣と思んよ助序と提ーー派の通ぐくふよ
反ぐ吾と紙とるくふの真伝ふうぐ炬るよ人毎よ家巣よ示て大よ吾吾
と百世ふ流紙ぐんべ奥と系幸よ賜へーーと後あふぐ炬ふん伝幸よ

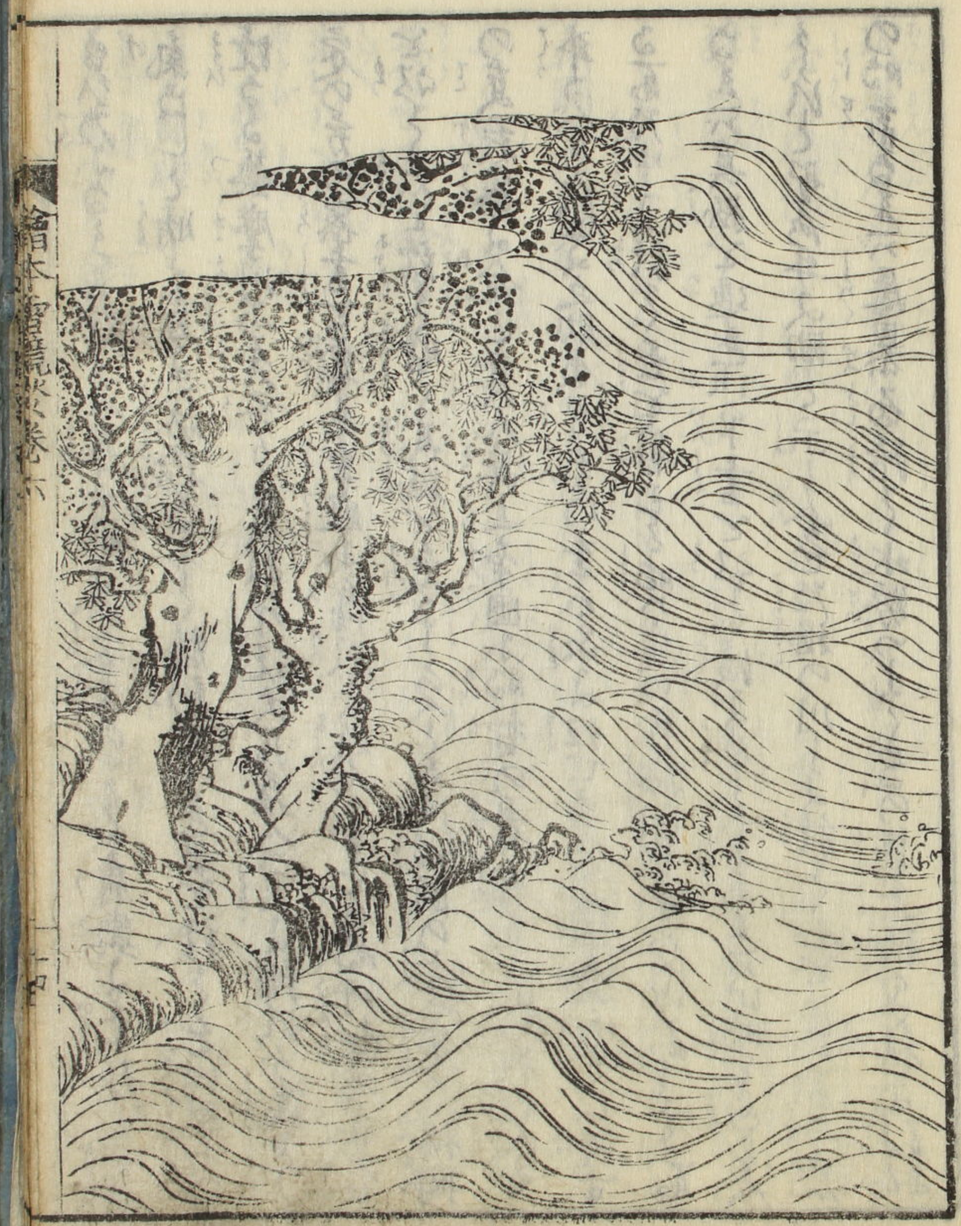
おのく粮流しのぐらふあぐ必定死人ふ泄んるのを見まく容易
事ふよこ日べくるるあるり私不肖なるまどる亦大よまたん事と希ふ
行鵜と異て事と逝ひぐ今用意ふ涙と嘉〳〵くるの新金と潮」
ひべ〳〵く奥尾よのふ指とにふ御で爾ふまべ義人爲〳〵又初式
幽耳よに事の世系圓油ふ紙云ふとよく知りぬ其るのと託んる教示く
生るとのくども大切の事るるぶ故ふ結く初と設て汝ぐ云と試く張く
形ふ知りく汝ふ思ふふ見ふ見不明の元るり中上ハ編ふ汝ぐ力と情
だ〳〵今為行るる御と用て事と来とそそや又助事と拙〳〵居熟ふ恵
と思てしけふ途中旅館ふ於く判あとるんハ景ふ元尾ありてる
事初孔小義く御伏の員たるまふ人の意と振るんも斗べるべ事ひ若
馬と好ふ多猪馬小く川と渡事ふ〳〵ハ徒能ふ小く水中に流机

馬の足と湯いる駕ふくく躍跳ん猪ハ行徒馬術飛練ありしもや
つふ水中ふ溺て害と事ふ必定るり形事不ふ出ハ人
刺客の一ふ為たるを恨く〳〵見義金の斗小くいんう義人ふと拘く
大小怪ひ誅極て知るり系統既ふ定ふ朱統のとふ事く
恩賞と行べ〳〵と真和又助と寝斗と示合せ両国の御ハ告知〳〵せん
間寝小付従ひ事るべしと堅く約〳〵是ひて居宅ふ帰る

義則云藥農川小く西変ふ遇事ふ話

貞治四年三月義則云ハ鎌倉立覲の日数事七月上旬鎌倉ふ殺
智恵〳〵武威と耀〳〵西国の旅行ふ赴ふ事大月義人ハ行ふ
別〳〵義く弱〳〵なるもふまハ竊ふ自ふ助ふ告其ハ屏輿に示ふ
んハ事結ふと称〳〵待ふふて結従ひ事ハ義則ふ人月の仲と見

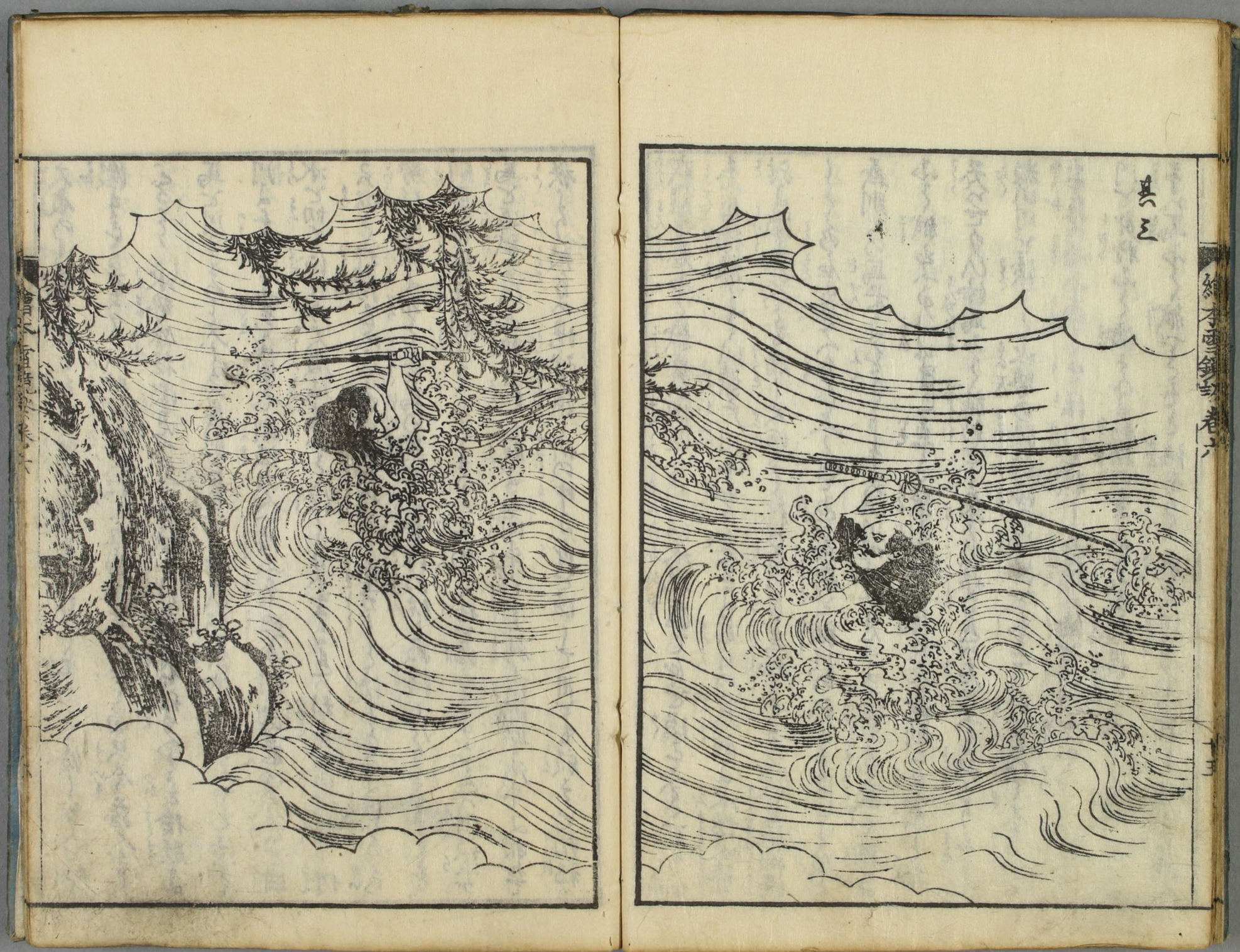
義則ろるこく
築摩川と陶し
猪人図



其二

あれかるゝと義人さん馬より降り肩輿よりまたがるまに長
氣色しと勝る日より必猛るゆく旅行せゝを日と經ゝをに紙おの
憂る藤摩川小えをとりあへぬ却て大凡義人へ生よ雖ども高川
定の方の家書を奪ひ事服小嘉彦より及んとする時好智の無吾
と云ゝ去と欲ゝ強く其紙を免るゝとも河内國の上へ定て極岡
の夏義家より命じ給へん其上本國小昭智の者有て豆の旅れんも
本ゝ必ゝ此等より助度身分の事ハ流れ組せ給へ人る河津ハ流れぬ冷ず
る事なれ中ゝ新ゝく去と言ふる時ハ定の方極岡の身ハ人の知ぐる而
ゝ是ハ其紙を退ぞ所書と云ゝく後より斗ゝ人るまに此時とる迄ゝ
ゝ此と豊為年ゝ助と示し合せ給へ川ゝより旅ゝく心と待ゝと思ふ
の時義ゝ是ハ暴暴面陸ゝく水勢つよくゝるの是ゝ紙ゝて紙より川ゝ

武ハ蟹ゝ歩ゝく紙ゝ見ひ偶た義時ハ行水乾為て身と隠ゝ
見南猶縁ゝく此藤戸川小ゝ見ゝる前日の暴雨より水流水勢
ゝ激ゝ人ゝも勝ゝ大ゝる紙ゝの是ゝ紙ゝも見人ゝ是ゝ流激湯
ゝ為ゝ屋も見人ゝ今ゝ目と思ゝ術と誘ゝの移ゝるまじゝ故と
義則ゝの馬ゝ乗ゝ渡ゝ中ゝ為ゝ此川の体と見ゝ水勢甚激ゝく猛ゝ
小ゝく紙ゝ乗ゝ此ゝ此ゝ思ゝ意ゝ蟹義と申ゝ付ゝ人義則ゝ完ゝ小ゝ
笑ゝ世ゝ見ゝ汝馬小ゝく緩ゝ行ゝ人今ゝ後ゝ嫁ゝ見ゝ為ゝ手を
数此川と渡ゝ水勢の強弱流の浅深を知ゝ為ゝ本ゝ綱ハ
義義の時小義ゝ宇法川と紙ゝ豊張ハ海と渡ゝ況や僅小此の
川と舟程小ゝく渡ゝ人ゝ行程の事ゝ為ゝ奥ゝ乗ゝ仏ゝ仏ゝ
手ハ馬小ゝく紙ゝ乗ゝ渡ゝ川ゝ岸ゝ乗ゝ人ゝ義人


其三
繪本西遊記 卷六

大度の沙を乗越と知らず懸しと練る時は却て馬ふく波しぶきと知
激まとる所之ゆり山の側級を拔之九郎判官馬の口と留只今落人多
こゞるとゝ水勢除程激乃人はバ馬試と仕長靴の人と之捨脫よ
馬と川とまろと入ゝるゞ義則云是と乃人のひ行乘試よ及がんやと續く
川よ乘入ゝ是よ因く側級六人一度ふ乘也義則云の前後左右と囲
水と切て後なり大度待馬ふく流しゝ幸る是バ数多の流れ見り何
久沼く程縁もと入ゝ各川よ先也ゝく乘方しゝと流しゝるよ乘方ゝ
勢強中流よ至く各馬の足と乘深ぬ流ぬ波ゝたりゝ是ゞも義
則云バ性強弦剛ゝまゝしゝ乘ゝ上馬術よ妙を得ゝ是バ例級ふゞ
馬と退紙ゝひ為勢と切ゝ肱よ之間半ゝを移ゝ山時壁強平又明を
疾ゝ彼方の堤際義ゝ柳の中よ身と隠ゝて目とも敵ゝと初移

と隠ひ形ゝと乃るよう時分はしゝと川よぶんぶゝと入と隠しく水底流潜
義則云ゞ待ふ馬の後足と跳ゝ巻と定め経刀と抜ゝく流れも
通ゝと二町を判久ゝ是バ行ふ抜ゝ乃ゝ馬遠ゝ跳ゝ上りゝく撫
抜ふゞゝゞ側是ゝ程よ到勢ゝ乃ゝ義則云も山不云よ憚も敵ゞゝ
共系ゝ水中ふ潜ゝ乃ゝ側級の面ゝ山伴と乃ゝ大ふ驚ゝ天地敵ひ
ゝゝんゝ系ゝ一よ死入ゝ乃ゝ真中よ久松之九郎早くも水底と潜ゝ義
則云と逐ゝゝく脇よ抱ゝ之幸して向の岸よ到ゝ流大月義人城結
として山方ふ跨ゝ諸士退ゝよ地付先義則云と川面の赤よ人数
官業と洞ゝく初ゝゝ人ゝゞも多圏水と服の上佩刀の結ふく陶を
張打ゝ悩其ゝく遠ふ勅強夜ゝゝも乃ゝゞ是バ途中ゝの
系と稱ゝく静ゝく敵山ゝ内様とゝ是ゝ為ゝ此時例級村

四

絵本西遊記 巻之一

も法師達よりうく水中へ乗入て助太と寄渡せんとせ
しかども彼方の座を潜るへきりとはけ方と捨く岩よりより川
柳の陰よ添く長行しよを即斗の下流小舟く裸体よ七首と携た
るるの者と樂くよりあるまとへ曲者ござんるまとく村瀬何へ者ども小
七首と奪ひ取ふせんと組るよ彼者の面ばくやひくん遠と何つく
後ひ水中小乗入へり村瀬も続くく乗入しるど彼へ裸体ば方へ長刀よ
水と潜く働自由るるべ是村瀬あ術よ達ざまへ及ばくまとを斗再
岩よより彼七そと携へ陸く岸よ車の法貫と大月義人よ若々まへば
大月故と大の驚し体よ遇へ岩と岸くりるへ系思小今日のよ
先年鎌倉の居館へ刺客と入たるとは類るまへば不臣の族と搜る屋
者のまをるりとへども金中よ於く必ずるの者と沙法有てこ

国家の政治まへまるの漏と振んば事小於くへ系法さへ面白まへ
是かもば事と示く紙へ系事まへ決ざるを変へくへくよ沙法せ
ひへ獄も事の泥ん事と忍まれば続ふよ泥んるを堅く問く彼七首と収ち是
其後続へ村瀬と拾側後の面へへるよ後久松へ九へ刀を振称
るるとしまへるふ

小松統波守一騎関と渉る話

和泉大須義則云ふ長のるよ鎌倉川よ達まへれ猟人の
外法く続ふよ両城へ山へ人へ山へ
と已し醫官の面へへ云もへるり国中の名医と名事く者法方と為
しへども急一事よ手傷と夫多へ内外の医療統よ其験なく数日

彼後手
一騎殺と
揚て
日向ちと
逐一図

且て遊去しまひくまこべ大小の諸侯考妣と喪の忌と白し歎歎ひとし
いくども泣ぐさたるくねべ氏有足利宗氏若顯春長門守使附て人義
討と情事当藥るりとく玄昌小枝月向守宗近に玄昌浦年
典賠石尾を水大月義人の五人に日続山と殺臣」急く孫金人
を赴名る釣り玄昌小枝彼波ちハ曩小玉に生ぬちよ毛して孫金
義事のに来を伊しとり仮女んの中竊小大月を粧ひ数年公城付
て真西ちと例ひ長名るり今後藥戸川と淡しの時真毫と練る
とくども強く素入ものよ及ぐ自ち護ともるさど上流小人数
を垂く水勢と退の後俗もるく僅の側後小位垂しまを問くん
大よる矣寒小動静と捜ぶんとそひしとど義則云の遠側よりく
真間とるざりしり義則云迷去あるく玄昌寒昌の面く孫金人

義芝せしこべ番間脈とるく真義長弟小西久松と九しと拾さ竊小
間名るハ今後藥摩川小く義事有し時大月義人ぶ西ねりよ素
わく名るざるあり足下ハ親く出結従小生まこべ真時の動静城義
知るべし若真時小南くこ考りしるく松と九しく善く素則り
矣と考る義も云ひく真時馬物駿るこの体落ちる事彩り
又村瀬事義素と左よ若を拾ひきんとしく遠り捨く巻り上
ひ人べ必定ち細の夏も有るべしと素し寒り弱間んともる内義家
長信付くるまこべ楽小南間の陸るく今り動く不審と賜いるり徒
波守肩と牧村瀬事義釣る事あこべ真ち細と間ちるよ小く堂前
まこべくこ武るると鰈の側後と内校の孫小拔嘉しく罰と定ぬしハ金
義人ぶ心術の測孫さ一るりと真義村瀬事義家長るぶ竊刀

自宅ニ来るべき者と通じ密夫を囲ひ置き藥ヶ川の辺細
見下條ニ岩屋よりくまなく探索ス審ニ明らかなるよし云河の下村漁夫
守ゞ側ニ居りうまびい柴藥ヶ川ニ放ち流中ニ仕掛ける水底ニ入
一時曲者有て水中ニ潜り岩ニ附る体柴結ひ付岩ニ寄よりて捕
んと互ニ挑争ひ先ニ渠ゞ組刀を奪ひ入れ敗ニ組敷んとせるに時
渠も強刀柴ゞまと振切再び水中ニ飛入ぬつぢひく水中を長下らく
ども渠ハ深身柴ハ浅瀬ニ上り頻ニ自由なるゆゑ故ニ引揚し時大月
氏ニ告るに及て子細有べし他ニ出べからざる旨堅く止らるゝ
柴曲者の面体尤美しきゆゑ吟味の役をも仰付らるべきに例
役の人と俱ニ家居せしめ置く其甚仮ニ長ひ之と真仕宜と毒しく
まゝ伝後吉大ニ驚き柴人と雖ども真仕

る者ニ彼曲者のゆゑを深く隠し事ニ託て見下を家居せしめたるを
以渠ゞ表ニ出る事大事ニ成りたり依まども疑と決ニ成て
妻ニ柴ハ殺し難く思ひ先の曲者大月ゞ用る所のものゆゑ曲
及び縁金の面ニ及ぶ徘徊し見下家居あるうへハ他ニ見識者ニ
以んを宥ん見渠を捕る屋ニ先の時より見下今ゞ揚ハ家居の体ニ
そなく良し密ニ彼ニ出ずく為ニ暫く村漁大ニ怒り私ニ小政を
取迎へ今ニ於て遠慢ニ為ニ送る所ニ二ハ草を分て為ニ崇いだし
おもれ芳ニ有べきハ法後守ニ久松ニ対ひ大月藥人已ニ不届の
端を為ればのよハ不虞を防の役るくらハ患ハ已ニ故ニ永今より
独て日向ニ小幸と為り真後他くべき大ニあり見下能初める
べきや久松奮然として岡家士と養幸百幸芸を用る幸一朔

ふあり若代らく西あくべ配と搭うく紙紙代ゆ佐渡守敵
走りよるふ跨日向ちゅう退付んと鞭をよてく廻とりるるふ暁ゆ及ぐ
続ゆ東口の関ゆ列りふ枝佐渡守急事ふ関く発出ると呼り通
扶んとゞ関を守有司独来く馬を遮り家単職とまく山石を守
ひへべ候今志呂の方くたりとも待隙をくはやへう通ひ佐渡
守磯と腿を待隙をりとるは家老の近逃と防ぎ為く家国のこんむと
しく只一騎疆をとる急ゆ美待隙携るの脚あくんをしまゆけ
まへ有司等ゆ勢ゆ碎易」ゆ加とる間ゆふ枝鬼ち鞭と扶関石を
代と廻通り撫ゆ撞ぐ日向守とで退くりるふ
未佐渡守日向ちゅうをひくの家事大月政尾ゲ漏本及び落未佐渡ゲ
出ふ者く後編ゆ出て

繪本雪続談巻之六畢